

お嫁さまの条件

Yukiko & Kouichi

山内 詠

Ei Yamauchi

eternity



エタニティ文庫

目次

お嫁さまの条件	5
結婚の条件	253
同じ世界	305

引用…太宰治「女生徒」(青空文庫)

お嫁さまの条件

私、坂本幸子さかもとゆきこは、ついこの間、三十歳になった。

二十九歳と三十歳、そこには深く大きい河が流れていると思っていたけれど、なってみればなんてことはない。ひょいっとひと跨またぎすれば通れる、小川のせせらぎのような境目だった。

三十歳って、子供の頃はもともと大人だと思っていた。

当たり前みたいに結婚して、子供がいて、もしくはバリバリと仕事をしていて、自立して。ぼんやりと思いついた未来予想図通りに暮らしていると思っていた。

でも実際なってみれば、何にも考えていなかったような学生の頃から大して成長していない自分がいる。

仕事はそこそこ、結婚どころか恋人もない、実家でのお気楽なパラサイト生活。

社会人になってルーチンワークに埋もれていると、成長や変化なんて感じられない。

毎日、毎年、同じことの繰り返し。経験をただ積み上げていくだけ。去年のことも、

一昨年のこと、一緒にたにして流れていく。

そうして結局何一つ、変わってなんかいないのだろう。

年齢なんかで区切れるものか。

なんて言えるのは、通った後だからなのかもしれないと思う。

これは何だか、世紀末に世界が減びなかった時に似ている。あんなに大騒ぎしていたのに、何にも起こらなかった時に。半信半疑なややこしい心理。

二十代なんて、放っておいても悩むお年頃。

恋愛から遠ざかれば結婚からますます遠ざかる。素敵な人はどんどん綺麗な女の子と片付いていく。

私が新卒で入社した会社は、居心地は悪くないけれどキャリアなんて夢のまた夢みたいな所だったから、余計に迷いは深くなってしまうのかもしれない。

そうやって悪循環を嘆なげくのは、すごく簡単なこと。でもそんなことしたって何にも変わらないことは理解できるくらい的人生経験はある。

正社員として採用されただけでも十分だって、本当はわかっている。愚痴ぐちを言える程、学生の時努力したか？ と問われれば答えは否だ。

それでも「この会社じゃない、どこか」なんて、私だけじゃなく、社会人という立場に慣れた人ならみんな考えることだと思う。天職に巡り合えたり夢を仕事にした人じゃ

なければ、隣の芝生はいつまでも青く見えるままなのだから。

転職市場に出るのなら、早いうち。

なんて考えながら耳触りのいい資格をいくつか取得してみたりなんてしているうちに、海に向こうの証券会社の倒産からあつという間に百年に一度の大不況。就職したての頃も不況だったはずなのに、景気の底はどこにあるんだ、ってテレビの中で澄ました顔して解説している経済学者を問い詰めたくなる。

迷って悩んで、うだうだしているうちに、三十歳。

あつという間だ。

変わりたいとは思っても、変れない、変わらない。

ところがそんなどこにでもいる三十路女だった私の人生は、なぜか突然動き始める。

ハリケーンも目じじゃない程の、大嵐の来襲によって。

始まりは、仕事にかかっていた一本の電話だった。

「坂本さーん、内線二番。総務課長から」

「あ、はい」

総務？ 何かあつたつげと思いつながらにも伝票を確認していた手を止めて、電話を受ける。

「もしもし、お疲れさまです、坂本です」

『お疲れさまです、総務の高野たかのです。本日、業務は立てこんでいますか？』

ちらつと脇に積まれた書類を見る。今日は別に急ぎの仕事は無いし、順調にいけば定時には帰れるだろう。真つ先に仕事の具合を尋ねるということは、何か時間のかかる手続きか。

「いえ、今はそれほど。何かありました？」

総務課になって、年末調整やら何やらの手続き以外に用事など思いつかない。

『少しお話ししたいことがあります、十四時に第三会議室まで来て頂けないでしょうか？ 一時間程度で終わる予定なのですが』

「あ、はい。大丈夫です」

『ありがとうございます。では十四時に』

「わかりました。よろしくお願いします」

受話器を置いた後、しばし考える。

第三会議室は七、八人も入れればいっぱいの少人数用のスペースだ。そこに総務課長からの呼び出し。

……もしかして、人事異動？

ウチの会社はそう大きくないので、総務課が人事関係の業務も請け負っている。でも

今のところ他の部署で欠員が出たという話は聞かないし、直属の上司からも何も言われていない。

首をひねりながらも一時間程席を外す旨を周囲に伝え、第三会議室へと向かうと、そこには総務課長以外の人もいた。

「じゃ、社長！」

「はいどうも、ご苦労さまです」

「お、お疲れさまです」

なんと鎮座ちんざしていたのは、社長だった。

大した会社じゃないけれど、それでも雇い主には変わりない。慌てて頭を下げる。どうして社長がここにいるの？

普段仕事じゃほとんど顔を合わせないのに、いったい何事？

もしかして私、何か悪いことした？

「まあどうぞ、話は座ってから」

良くない想像が頭を駆け巡ってかちんこちに固まってしまった私は、促されてよろよろと椅子に腰かける。

すかさず、総務課長からプラスチックカップに入ったコーヒーが差し出された。うわ、本当ならお茶出しなんて私の仕事なのに。ウチの会社は暗黙の了解で、お茶出しはその

場にいる女性社員がやるってことになっている。古い慣習が幅をきかせている会社なんですよ。社長には言えないけどね。

しかし、すでに入れてもらったものはどうしようもない。心を落ち着けようといつもしている通りミルクを注ぎ、マドラーでぐるぐると念入りにかき混ぜ一口飲む。うん、普段通りの味だ。

社長も同じようにコーヒーに口を付けている。すぐに話し始める気はないようだ。

コーヒーの香りを嗅いだことで、とりあえず動揺は治まった。話し合いには平常心が大切。

さあ、クビか異動か、なるようになりやがれ！

「そ、それで、お話というのは」

社長がカップをテーブルに置くタイミングを見計らって、こちらから口火を切った。

「ああ、うん、まず仕事の話ではないから。だからリラックスして聞いて下さいな」

「は、はい」

というか、社長と仕事以外の何を話すのよ？ まあでもその言葉を聞いて、かちこちだった身体から幾分力が抜けた。

「えーとね、それと、これはセクハラとかそういうのではないから。だからほら、高野君にも同席してもらっているのだけれど」

「はい」

最初にセクハラじゃないって断るなんて、ますます何なの？

「坂本さん、結婚の予定はある？」

「けっ、こん、ですか？」

結婚、と言われて、セクハラ云々の確認理由を理解する。

以前年配の社員が「彼氏はいるのか」なんて、気にする人は気にすることを派遣の女の子に言ってしまったことがあった。その子がすぐさまセクハラだなんだと騒いで、結構揉めたんだよね。

ウチの会社は社内恋愛に寛容なせいとか、そういう社内ゴシップが皆大好きだ。

さらにいい意味でも悪い意味でも昔堅気むかしかたぎで、オジサンたちの絵にかいたようなからかいなんてものは、三十歳の大台にのっちゃった私を含む女性社員全員が慣れたもの。

だから皆騒ぐほどのことでもないとは思ってたけど、その派遣の女の子はどうしても許せなかつたらしく、散々に喚き立て、味方がいないとわかるとすぐさま辞めてしまった。

そんなことを頭の隅で考えながら、社長の質問に答える。

「いえ、ありませんが」

「付き合っている人は、いるのかな。正直にお願い」

「いい、いません」

何この質問攻め。

「結婚したいなっていう気持ちはある？」

「一応はあります。ですが、まず相手がいないと始まりませんので」

ここしばらく、彼氏どころかデートもしていない。度々誘われて合コンは行くけど……こなして終わりだ。楽しく飲んで、はい終了って感じ。

そんな私の寂しい返事を聞いた社長は、なんだか嬉しそうに言った。

「じゃあ坂本さん、お見合いしない？」

「はあ!？」

社長相手とは思えないような声を出してしまった。いかんいかん。

「すっごくいい相手なんだよ！是非！お願い！」

しかし社長は私の間抜けな返答などまったく気にせず「この通り！」とばかりに両手を合わせて頭まで下げている。

なんなんだ、一体？

「急に言われても……社内には私よりもっといい子が、いると思います。例えば、営業一課の鈴木さんとか佐伯さんとか若くて美人の方が……」

自重で言うのもなんだけど、私はもてない。一重の目はどんなにメイクを頑張っても大きくは見えないし、面長でさらに一六七セ

ンチと背も大きいせいがか昔から老けて見られる。

十六歳の時、ノーマイクで出かけた駅ビルで、クレジットカードの勧誘を「学生だから」と断ったら「大学生でも大丈夫！」と太鼓判を押されたくらいだ。最近ようやく実年齢と外見が一致してきたように思う。まあ要するに、ずっと三十路顔。

おまけに何とか頑張って男性とお付き合ひまでこぎつけても、まったく長続きしない。

つまらない、重い、ブス……一通り、男の人から言われてショックなことは言われている。

そんな私に比べて営業一課の事務二人は他社でも評判の、我が社の美女ツートップと言ってもいい存在だ。社長があんなに腰を低くしてお願ひするくらいの相手だから、取引先から頼まれたとか、そういう義理とか絡んでいるものだろうし、会社の信頼に関わるのなら綺麗どころにお願ひした方がいいと思う。

鈴木さんは、かつちり系の服装が良く似合う和風美人。佐伯さんは密かに「ハンター」なんて呼ばれているグラマー美人で、恋多き女性だ。社内の若い男の大抵は、佐伯さんに一度はふらつといったことがあるだろう。

社内情報網によると、確か二人とも今のところフリーのはずだ。

「ああ、鈴木さんは今度結婚するの」

「えっ、そうなんですか！」

なるほど、ガードが堅いと有名だったのは彼氏がいたからなのか。

以前、突然右手薬指に指輪をしてきた時に相手ができたのでは？ って噂になっていただけ、本人がずっと否定していたからうやむやになっていたんだよね。

やっぱりかあ、なんて勝手に納得していたら、社長が含み笑いをしながら暴露してくれた。

「高野さんになるんだよー」

「高野さんって……もしかして！」

社長はにやにや笑いながら隣に立つ人を見やる。総務課長の名字は高野だ！

「上手くやったよねえ、高野君。若い子捕まえて」

「はあ、まあ」

眼鏡のずれを直すとみせかけて顔を隠した総務課長の頬は、先ほどと比べるとちよつと赤い。

うっわあ、総務課長と営業のマドンナが結婚ですか！ これは久しぶりのビッグゲカッブルじゃないの。いいネタゲット！

「じゃあ佐伯さんは……」

ここだけの話だけどね、と社長が片手で口元を覆いながら声を潜めて身を乗り出して

きたので、ついつい釣られて私も身を乗り出した。

「二課の三浦君と付き合ってるんだって」

「えええええ！」

「坂本さん、いい反応するねえ」

社長が嬉しそうに言う。ああ、誰かに言いたくてたまらなかつたんだろうなあ。いや、その気持ちわかりますよ。あの二人、仲がいいって話は聞いたことあったけど、まさか付き合っていたとはっ！

うわ、今日の三時の休憩時間が楽しみだ！ 肴は、営業のマドンナたちの恋模様に決まり！

「……社長、話が脱線し過ぎでは？」

声に含まれる棘とげを隠さずに、総務課長が社長を制する。

「あ、まあ、そんな感じでね、皆さん結構相手がいるみたいなんだよ」

総務課長からチクリとされた社長は、わざとらしく咳払いをして話を本題に戻した。

「彼氏とかいる子に無理矢理おススメするのはね、それこそセクハラじゃないかなと思っただけ。だから先に確認させてもらった訳です」

「でも、他にも独身はいると思います」

「それがね……」

社長がちらりと総務課長の方を見ると、総務課長が苦笑いしながら説明してくれる。

も、もしや私以外全員に相手がいるってか!? それ、いくら私がない女だからって、地味にシヨックなんですけど……

「我が社に在籍している女性社員のうち、独身なのは坂本さんを含めて十七名おります」

「はい……」

「安心していいですよ、坂本さん。その全員にお相手がいるわけではないようですから」
まるで主文を後回しにされた判決を聞く被告のように頊くだ垂れた私に、総務課長からすかさずフォローが入る。私の頭の中、お見通しなんですかね。

「ただ今回のお見合いにつきましては、少々事情がおります」

「事情、といいますと」

社長は、言いたくなさそうに視線を斜め上に泳がせる。

「相手がね、私の学生の時の後輩なんだ」

社長は確か四十四歳のはず。

今年の新年会の挨拶で「ぞろ目でめでたいけど、四だから不吉かもしれないなあ」なんて言ってたから覚えてる。ということは社長の後輩って、若く見積もっても四十前後？ その年齢で見合いて。……いや逆に見合いか手立てはないか。

「……社長、失礼ですが、先ほどすっごくいい相手っておっしゃいませんか？」

「年齢以外は完璧と言ってもいい相手なんだよ」

年齢以外完璧!? ますます怪しい。

「じゃあ総務の村瀬さんはいかがですか？ 年齢が近いですし」

村瀬さんは四十代でバツイチだけど子供はいない。ちよっとお節介だけど悪い人じゃないし、いつも綺麗にしている年齢よりは若く見える人だ。

「うーん、大きな声では言えないけれど、相手が初婚の方を希望しててね」

おいおい、四十代で贅沢な話だな。

「どうだろう。受けてもらえないかね」

社長がまるで縛るように私を見る。なんでこんなに必死なんだろう。よっぽどこのお見合いを断れない理由があるのだろうか。

「……会うだけなら。お断りするか、お付き合いするかは私が決めて構わないでしょうか？」

社長の眼力めぢからに負け、承諾してしまった。くそう、普段はメタボなお腹を揺らしているも、有無を言わさぬ態度はやはりトップに立っているだけあるぜ。

まあ仕事だと思えば、どんな男が来てもなんとかあしらえるだろう。伊達だてに年は食っていませんのでね。

「もちろんだよ！ ありがとう！」

感激を抑えきれないとばかりに、社長が右手を私に向かって勢いよく差し出してきたので、慌てて握り返すと、ぶんぶんと子供のようには振り回される。テ、テンション高いなあ。「大丈夫、会ったら絶対に断ろうなんて思わないから！」

社長の自信満々なその言葉に、私は困惑しつつもどんなに完璧な男が来るのか、少しだけ楽しみになってしまったのだった。少しだけ、ね。

「詳しいことは高野君からメールしてもらおうから！」

じゃ、あとよろしく！ とご機嫌で去っていく社長を会議室の前で見送る。

大して飲んでいないコーヒーマグのカップを総務課長と二人で片づけた後、エレベーターを待っていると、彼が口を開いた。

「……先ほど聞いた話は、内密にしておいてくださいね」

ちらりと横にいる総務課長の顔を見れば、口元には笑みが浮かんでいるけれど、目は全然笑っていない。

「……了解しました」

やっぱり、駄目でしたか。せっかくのスクープ情報だったのに……

「遅くなりました」

所属部署に戻って留守をお願いしていた後輩に声をかける。ウチの会社はお茶くみだけじゃなくて、電話応対も女性の仕事とほぼ決まっているため、私がいなくなると同じ

事務の子の負担が増えてしまう。

「お疲れ様です、電話は一件だけでしたよ。メモは机の上です。それより呼び出し、大丈夫でした？」

「ありがとう。大丈夫」

お見合いの依頼だなんて流石さすがに言えなくて、詳しくは語らないで笑ってごまかす。沈黙は金なりです。

「ならよかった。総務からの呼び出しって、なんか怖いですよねえ」

「ホント、何かの手違いで先月の給料を多く振りこんでました、とか言われたらどうしようかと思っちゃった」

「うわー、それ一番嫌だ！」

そんな会話も電話が鳴ることで、あっさりと打ち切られる。通常業務に戻ってしまおうと、社長からの依頼なんてあつという間に頭の片隅に追いやられてしまっていた。

ところが社長という職業は、フットワークが軽くないとできない役職なのかもしれない。何しろあの面談(?)から三日後には、もうお見合いの詳細が示された社内メールが総務課長から届いたのだ。

本気だったんだなと感心しながら、こっそり待ち合わせ場所と時間をメモった後、万が一を考えてそのメールは削除。社長のお声掛かりでお見合いしただなんて、周囲に知

られたら格好の話のネタにされてしまうからね。

どんな人なんだろう。

社長の後輩、ということしか聞いていないから、豊かなお腹の人しか想像できない。

学生時代の知り合いらしいけど、大学？ それとも高校？

年齢以外完璧っていうのが、怪しさ満点だし。

……まあいい、ただ会うだけだ。

社長から依頼されている以上、ある意味仕事の一環みたいなものだしね。

場所として指定されたのは、都内のホテルのラウンジ。来週の日曜日、時間はなんだから中途半端な十六時。双方付添人無しだから、気兼ねは無い。

いっそのこと、かっぱーんと鹿威しんぎしが風雅な音を立てるお庭があるような料亭だったらよかったのにな。その方がいかにもお見合いって感じがするじゃない？ 美味しいご飯も食べられそうだし。でもそんなことしたら私は、振袖とか着なきゃいかんのか。

三十路みそじで振袖……

成人式の着物なら一応持っているけれど、さすがに当時流行っていた柄や色は、もう無理があるわな。

色々考えた結果、格好は無難にグレンチェックのAラインワンピースにオフホワイトのジャケット姿。一応フォーマルな場ってことを意識してみた。メイクも髪型も清潔第

一でまとめたよ。

そして礼儀として、トイレで最終チェック。磨かれた鏡の中に映る私は、相も変わらず地味で若くない女だ。……どうせ私が断らなくても相手から断ってくるだろう。

トイレから出て、足音を吸い込むようなカーペットを踏みしめてラウンジへと向かうと、背筋を伸ばしたスタッフが出迎えてくれる。

「いらつしゃいませ、お一人様でいらつしゃいますか？」

ええ、普段は「おひとりさま」なんですけどね。

「いえ、待ち合わせで。小田桐おだぎりで予約が入っているはずですが」

小田桐は社長の名字だ。

結局相手についてはまったく教えてもらえてない。年齢以外完璧というのだから、お金はあるとかそういう人なのかと予想したけれど、どうだろう。

「かしこまりました、どうぞこちらへ」

ここのラウンジには以前アフタヌーンティーを楽しみに来たことがある。チョコのコースに添えられていたラズベリージャムの酸味が、ほろ苦いチョコレートにすごく合っていて美味しかったなあ。今日も頼んじゃおうかな。お見合いで、三段のティースタンドってアリかしらん？

案内されたのは、観葉植物と照明で他の席とは仕切られた上に、奥まった場所にある半個室のような席だった。これじゃ、せっかくの綺麗な景色はあんまり楽しめないんじゃない？ と一瞬思ったけれど、今回のメインはお茶じゃなくてお見合いだ。なら、こういう席の方がいいのかもねと思ひ直す。

こちらに背を向けて、すでに誰か座っている。マナー通り五分前に来たけど、どうやら相手はもう少し早く来ていたようだ。

「お連れ様がお見えです」

「ああ、ありがとう」

スタッフへ答える声が、少し離れた私にはつきりと聞こえてきた。さして大きくないのに随分通る声だな。低くて耳に残る。

座っていた男性が立ち上がり、最初に感じたのは、背が高い、ということだった。がっしりとした広い背中に、メタボな社長の印象はいっぺんに吹き飛ぶ。

そして男性がゆつくりと振り返った姿に、思わず呼吸が止まった。

——大丈夫、会ったら絶対に断ろうなんて思わないから！

社長の言葉がフラッシュバックする。

だってだって、そこにいたのは多分日本中の誰もが知っている、そのくらい有名な

俳優、榎浩司だったのだ。

榎浩司と言えば、舞台出身でテレビドラマや映画で大活躍、アカデミー主演男優賞も受賞しているはず。ついこの間まで放送されていた検事の連続ドラマ、欠かさず見たよ！

そ、そんな大スターが、なんでこんなとこにいるの？

「どうも、初めまして」

「はっはい、初めまして」

声を掛けられて、ようやく我に返る。コメツキバッタのように慌てて何度も頭を下げた。今、私もものすつごく間拔けな顔をしていると思う。

いや、待て、落ち着け私。ただ似ているだけかもしれない。というか、別人でしょ。

そんな簡単に大スターに会えるわけじゃないか。しかもうちの社長のご紹介のお見合いで。

「今日はよろしくお願います」

「いえっ、こちらこそ」

席に着いて改めて目の前の男性を見る。なるべく凝視しないように、顎のあたりに視線を合わせて、こっそりと。あんまり視線を動かさずと挙動不審になっちゃうから。

やっぱり、見れば見るほどテレビや映画で見たことのある榎浩司その人だ。

顔かたちは一見すっきりと整っているけれど、そこに感じるのは美しさや甘さではなく、もっと激しくって強いもの。剛毅であるとか、武骨と呼ぶのがしっくりくると思う。彼の容姿の中でも、とりわけ視線を引き寄せられてしまうのは、やっぱり目だ。鋭さを宿した瞳が、ただでさえ強烈な印象に、さらなる力を加えている。だけど目尻と涙袋に少しだけ寄る皺は、まるで元々は野性的で粗削りだったものが年月と経験という名の研磨を経たことで、穏やかさをまとわせているようだ。

……まあ要するに、とびっきりいい男ってことなだけけど。

精悍さを漂わせたい男ってだけじゃなくって、渋い大人の色気がむんむんです。ただ座ってるだけなのに、ものすつごく絵になる。よく芸能人にはオーラがあるとかいけど、確かに、ただのイケメンじゃ絶対に醸し出せないものを全身から発している。

多分、本物。

ていうかこれが偽物とか良く似ている人だったら、本物はどんだけすごいんだって話になっちゃうよ！

私が座って一呼吸おいたのを見計らったように、スタッフがメニューを持って現れた。

「お話の前に何か頼みましょうか」

「あ、はい。じゃあ私は、シングルエステイトアッサムで」

とりあえずメニューを開いて、すぐ目に付いた紅茶の名前を口にした。彼はアメリカ

ンコーヒーをオーダー。

注文が済むと一転、沈黙が訪れる。遠くにピアノの音が聞こえるけれど、今はとても楽しめるような状況じゃない。

「改めまして、榊浩一と申します」

口火を切ったのは、彼の方だった。あれ？　こういち？　と一瞬思ったけれど、深く考える前に返事をしなきゃと気が焦った。

「坂本幸子と申します。このたびは小田桐からご紹介いただきまして」

動揺を隠そうとすると、ビジネスライクな言葉しか出てこない。頭を下げる私を、榊さんは軽く手を振って止める。

「いやいや、そういう堅苦しいのは無しにしましょう。そのために二人きりで会っている訳ですから」

「わかりました」

顔を上げて目を合わせると、榊さんはふっと目を細めた。ひよええ、笑顔やばい！ 見とれないように咄嗟に視線を下へ逸らすのが精一杯だけ。

まてまて、これはお見合いだ。平常心、平常心。

「何か、僕に関して小田桐から聞いていましたか？」

「いえ、何も」

後輩とは聞いていたけれど、それ以外は年齢すらちゃんと教えてもらってない。

「すみません、それに関してはこちらからお願いしたことなんですよ」

「と言いますと」

「先入観を持たれると、困るので」

「先入観、ですか」

まあ確かに最初に相手が俳優の榊浩司だって知っていたら、もう少し気合い入れてきたよね。最低限美容室でセットくらいはしたな、うん。

……というか、なんとしてでも断ったかも。恐れ多くて。

大スターなんて、遠くから見ているくらいでいいよ。こんな至近距離に存在されたら心臓に悪すぎるわ。いや、その前に信じなかったな。今も信じられないし。

ふと総務課長の笑つていなかった目が頭を過った。確かに事情、ありすぎる。

多分社長の考えていたお見合い相手の第一候補は鈴木さんだったんだろう。

相手が榊浩司だったら、自分から乗り換えられたっておかしくない。彼氏なら気が気じゃないよね。

会わせたくなかったら、社長を納得させるしかない。それで今まで隠してきた付き合いのこをばらさざるを得なかったんだろう。そこできつと色々突っ込まれて、結婚することまで白状したと。あの社長の様子じゃ、相当根掘り葉掘り聞いているだろう。

今のところ社内には噂は広がっていないけれど、本当は言いたくなかっただろうな。鈴木さんは簡単に男を乗り換えたりするような子には見えないけれど、不安だよ。可愛い子を彼女にした男は苦勞するなあ。まあ、幸せな悩みだ。悩みすぎてハゲてしまえ。

あまり見つめたら失礼だろうと視線を顎からさらに落として、喉仏あたりを眺めながら、「自惚れていると思われるかもしれませんが……坂本さんは僕をご存じですか？」

へ？ 何当たり前のことを訊くんだけ？」

「はい、存じ上げております」

「何か疑問をお持ちになりませんでしたか？」

「いえ、特に」

と言った後に、そういえば名前が違ったなと思に至る。いや、それだけじゃなくて質問疑問はてんこ盛りですよ。社長とはどういう関係なのかとか、そもそもなんでお見合いなんでしてののかとか。

でも一旦無いつて言った後、やっぱりありますってのもなんだか間が抜けている感じがして、黙って涼しい顔を作ってみる。あれこれ訊いてミーハーっぽく思われるのもなんか嫌だし、というのは言い訳で、上手く口が回らないだけ。

いつもこうだ。頭の中ではぐるぐるいろんなことを考えているのに、言葉にできない。

まあいい、こちらが何も知らない以上、主導権は最初から向こうにある。

「お待ちせしました」

そうこうしているうちに、注文していた品物がやってきた。

ポットに入った紅茶を茶漉しに通して注ぐと、ふんわりといい香りが漂う。なみなみには注がないで、七分目まででストップ。

アッサムはストレートで飲むにはちょっと濃い。だけどその濃い中に甘みがあるから、ミルクティーに合うんだよね。

思わず口元が緩む。紅茶は好きだけど、普段はもっぱらティーバッグだ。一杯千円を超えるお茶なんて、そうそう楽しめないもの。しかもこの茶器はウェッジウッド。自分じゃ絶対に手の届かない美しいカップは、見ているだけでうきうきしてくる。

ところが意識を紅茶へと集中させていた私の耳に、信じられない言葉が飛び込んできた。

「結婚を前提にお付き合いしませんか？」

今日初めて顔を合わせた彼は、嬉々として紅茶にミルクを注ぐ私に突然そう言った。とりあえずミルクを適量紅茶に注ぎ、スプーンでよくかき混ぜたあと、一口飲む。私はミルク後入れ派なのだ。うん、美味しい。味覚は正常、と。

では聴覚はどうだろう。いまひとつ自信がないので問い返してみる。

「今なんとおっしゃいました？」

「結婚を前提にお付き合いしませんか、と」
微笑んでいる榊さんの前で思いっきり顔を顰めそうになるのを堪えて、私も笑みを顔に貼りつける。

ちよつと待て。

まだお互い名前を教え合っただけで、自己紹介もまともにしておりませんが。

私の家族構成とか何の仕事をしているとかは、仲介人でもあるウチの会社の社長から聞いているのかもしれないけどさ。それより何よりあなたと私はついさつき、ほんの十数分前に出会ったばかりですよ。

いや待て待て待て、この十数分で何かあった？

初対面の男性にお見合いとはいえ速攻で結婚とか意識させちゃう、ウルトラC難度の技なんて練り出したりしたっけ？

こめかみに指をあてて、しつかと考えてみる。

……ぜんぜん思いつかない！

持ったままだったカップをそつとソーサーに戻す。よし、指先は震えていない。

なんとか心を落ち着けるために、もう少し、時間が欲しい。だから質問には答えず、こちらから問いかける。

「お申し出にお答えする前に、質問してもよろしいでしょうか」

「どうぞ」

「……もしかして、初めてではいらつしやらないのですか？」

うまく回らない頭だけれど、なんとなくそんな気がしたのだ。手慣れている感じと言えはいいか。自分の素性を隠して先入観を持たれないようにしたこととは、以前失敗したことがあるんじゃないの？

「そうですねえ、かれこれ今回で五回目でしょうか」

やつぱり動揺は隠せなくて、主語を抜かして問いかけてみたけれど、どうやら質問は正確に相手に伝わったらしい。指折り数えながら、榊さんは躊躇なくにこやかに答える。

「……そ、それはそれは」

「多いですよねえ」

い、一応自覚はあるわけですね。お見合い五回って、相当じゃない？

「過去四回もお見合いされた理由をお伺いしてもいいですか？」

「気になります？」

「ならないとは言えません」

五番目の女としては、当然でしょう。

この誰だとか個人を特定できるようなことはあまり詳しくはお教えできませんけど、と前置きして。

「一人目はね、二十歳の大学生でした」

「……ちよっとお年が離れてらっしゃいますね」

正確な年齢はわからないけれど、榊さんは四十歳を超えていたはずだ。なら二十歳じゃちよっとどころか、まるで親子。

「それもありませんが、まあ、そのお嬢さんよりもお母さんの方が熱心すぎてちよっと、ね」

「ああ……」

ですよねー。憧れの俳優が家族になるかも、なんてことになったら、そりゃあハッスルしちゃうよねー。しかも二十歳の娘の母なら、どんぴしゃの年代だもんねー。下手したら娘じゃなくて私と……なんてドラマの見過ぎですね、はい。

「二人目は二十五歳で、普通にお勤めされました」

「あら、いいじゃないですか」

二十歳と二十五歳じゃどっちも似たようなものに感じるかもしれないけれど、女の五歳は男の十歳って言うじゃないか。二十歳差と十五歳差だったら、後者ならギリギリセーフっぽい。やっぱり二回り近くの差は、ちよっと離れすぎよね。

「こちらは、僕というよりは芸能人の妻というものに非常に興味のある方で」

「ああ……」

その人本人よりも、持ち物である肩書に惹かれる人っていうのは珍しくない。どこか大学を卒業しているとか、どこの会社に勤めているとか。まあ榊浩司と言えば、素敵なルックス以外に、地位や名誉をたくさん持ってらっしゃいますしね……

色々持っている人も大変なのね、なんて思うけど、何一つ持っていない者の僻み^{ひが}とかじゃないですから。

「三人目も同じような方でね。僕自身ではなく、自分を芸能界へ売り込むために結婚したいという方でした。一般の方だったんですけれどね」

「ああ……」

たまにいるよね。もともとは一般人だったのに芸能人と結婚して嫁の方がしゃしゃり出てくるのって。

芸人さんの嫁とかだったら、許せる時もあるけど。ほら、お宅拝見なんかで奥さんや子供が登場するじゃない。あと鬼嫁、とか言って弱気な旦那さんとセットで出演していたり。

でも榊浩司の奥さんというフレコミで、しかも若い子がテレビとか雑誌とかに出てきたら、正直私はちよっと引く。

四人目もまあ二人目や三人目と似たような感じだったらしく、それはもうご愁傷様としか言いようがない。

私の口からは「ああ……」しか出てないよ。しょうもない女にはすっかり当たってきたのね。もちろん私も含めて。

でも普通四十路男よそぢだったなら、二人目や三人目のようなタイプの女にはころっと騙だまされてしまふんじゃないだろうか。そもそも榊造司の相手なのだから、仲介してくれた人だって下手な女性を紹介しているとは思えない。

頭がよくて顔もいい女の心の裏の裏を見抜ける男なんてそう多くはないけれど、多分目の前の人は計算高い女の裏側を見抜いてしまふ人なんだろう。

「……大変失礼ですがお見合い、向いてらっしゃらないのでは？」

いい意味でも悪い意味でも女に騙だまされないタイプの人は、紹介とかは向いていないと思います。自力で何とかしないと。

「でも、お見合い以外に方法が思いつかないのです」

「御冗談を。榊さん程の方でしたら、よりどりみどりでしよう？」

社長の言う通り、年齢以外は完璧なのだ。

あとひとつかかるとしたらどこ？ 公務員とか銀行員とか、安定した職業じゃなきゃダメ！ っていう人じゃなければ問題無いはず。

ところが榊さんは蠟燭ろうそくの火を吹き消すように、浮かべていた笑みを一瞬にして仕舞いこんでしまった。うん、深刻な顔も大変格好いいです。

「僕は今さら恋愛がしたいわけじゃない、結婚して家庭を作りたいんだ」

最初から結婚前提のお付き合いを望むなら、お見合いするっていうのは、まあ間違っではないんですけど。ご自身の立場とか価値つてものを考えてくれ。

「……お相手に相応しい方々が職場にたくさんいらっしゃると思いますが」

それもとびつきりの美人ばかり山ほどいるじゃないか。しかし私の言葉に、榊さんは少しだけ困ったように眉を寄せた。いちいち行動が男前だな。

「うーん、女優さんは無しなんです」

なんで？

口には出さなかったけれど、私の顔にはでかでかと書いてあったと思う。役者同士の結婚なんてよくある話とか、ある意味職場結婚じゃないか。

「これは俳優という特殊な職業のせいなんですがね」

「はあ」

わけがわからなくて間抜けな相槌あいづちを打ってしまふ。

「以前、同業の友人が付き合っている女優さんと、セックスをすることがありまして」「セツ!？」

紅茶に口付けていなくてよかったよ。危うく嘔くところだったじゃないか。

「もちろん仕事、演技ですよ。……ですが、どうも妙な気分になってしまつてね」

「ああ……」

それは確かになんだか気まずいなあ。

演技なんだから、浮気でも裏切りでもなんでもないのでだけれど。気が進まなくても友人の彼女とのラブシーンがあるからという理由で依頼を断るのって役者としてどうなの？　って感じだしね。

「役に同調して相手に恋愛感情を持つてしまうことは、珍しい話ではありません。実際それがきっかけで付き合つたり結婚したりしている方々はたくさんいますし。それを否定するつもりは無い。ですが……僕はちよつと無理だなと思つたわけです」

なるほど、それなら無しただわ。

「でも女優さんじゃなくても、周囲には他にもたくさんいらつしやるのでは？」

「他にも、といますと？」

「タレントさんとか、アイドルとか、アーティストの方とか。あとスタッフの方とか……」

それこそ数え切れない程いるだろう。ところが榊さんは苦笑しながら否定した。

「同じ世界と思われがちですがね、分野が違つたと全然顔を合わせませんよ」

「そういうものなんですか」

そういうものですよ、と榊さんは頷きながら続ける。

「歌手の方なんて、まともに顔を合わせたのは紅白のゲストに呼ばれた時くらいなものですよ。バラエティも宣伝の時期にしか出演しませんから、タレントさんともそう会いません。スタッフの方とは、そもそもそんな色っぽい話にはなりませんし」

はあ、なるほど。つて納得しそうになつたけど、今さらつとすごいこと言つたな！ 紅白つて！　そういうえば一昨年の大河ドラマ、主演してましたね。はい、私も見ていました。そつか、紅白にも出てたんだ。記憶が曖昧だけど、そうだったかも。

感心しながら榊さんを見ると、悪戯いたづらっぽく口元が上がっている。

……ちよつと色つけましたね、今。さつきからちよいちよいこつちの反応を試すようなことすんなあ。こつちは素人なんだから、本当なんだかどうかかわからない話は止めてくれよ。

「僕に出会いが無いということ、お解り頂けましたか？」

「……それは解りました。ですが私に交際をお申し込みになる理由は、まったく解りません」

「本当に正直な方ですね」

また苦笑いされてしまった。

私、そんなに正直かな。当たり前のことを訊いたつもりだったのだけれど。

榊さんは気分を害した訳では無いらしく、コーヒーを一口飲むと語り始めた。

「お見合いを四回しまして」

「はい」

「さすがに少々懲りてしまったんです。でも、お見合い以外にいい方法は思いつかない」「そうですね？」

私みたいな地味でもてない女だったら、そのセリフもすつごく理解できるけど、こんな男前に言われてもなあ。入れ食いだろ、入れ食い。そもそも選り過ぎなんだよ。素直に騙だまされておけよ、可愛くて若くて知恵のある子にさ。

でも多分、そうなったらすつごくがっかりするけど。

ああ、榊浩司もやつぱり若くて可愛い子がいいんだなあ。矛盾しているけど、いちファンとしてはそう思ってしまう。

「そうですね。お見合い、というから構えてしまうけれど、結局は紹介なわけだから自力で見つけられないなら、これを続けるしかないでしょう？」

「なるほど」

まさか榊浩司が合コンするわけにもいかないだろうしね。でも、まあ合コンも友人の紹介しょうかいだよな。

「ただ流石さすがにこの年齢じゃ条件うんげん云々言える立場じゃないと思って、今まではできれば結婚の方とだけお願いしていたんです。でも、今回五回目にして細かく条件を付けさせて頂いたんです」

えーと、条件が初婚ってだけって、あなたの立場からすれば控えすぎですよ。謙虚にも程があります。本当は条件がたっぷりあるのに、ストライクゾーンを広く見せかけたからこうなったわけか。

「その条件に、あなたがびったりだったんです」

どんな条件をつけたら私がびったりなんですか。

「……その条件とやらをお聞きしてもかまいませんか？ 質問ばかりで申し訳ないんですか」

「一生に関わる問題ですからね、質問があつて当たり前でしょう」

「はい！」

私が聞きたいのはずばりそこです、そこ！

ところが榊さんはにっこりと笑いながら、言い切った。

「でも今は教えません」

「な、なぜですか？」

榊さんは答えず、身を乗り出してテーブルの上に頬杖をつくとしつと私を見つめ、逆に問いかけてきた。

「お休みはいつも土日ですよね？」

「まあ、そうです」

「じゃあ再来週の土曜日、デートしましょう」

鋭さを宿した瞳が、まっすぐに私を射抜く。絡め取られて視線を逸らせない。熱視線ってこういうことを言うのだろうか。じりじりと焦げるような錯覚。それなのにぞくりと背筋に寒気のようなものが走る。

「デ、デートって、どういうことですか？」

「次会った時、先ほどの質問に答えます」

「いや、その」

この話はお断りするつもりなのですが、とはさすがに本人には言えない。

なんとか逃れようと紅茶を飲んでみる。さつきは美味しいと感じたのに、今は全然、味がわからない。こんな風に男の人に見つめられたことなんて数えるほどしか無くて、どうしたらいいのかわからない。

「駄目ですか？」

追い打ちをかけるような低く耳に残る一言に、私は白旗を上げた。

「……わかりました」

ここでノーと言える女はいるのだろうか。いたら無条件で尊敬するよ……

2

いつか私だけの白馬に乗った王子様が現れる、なんて夢物語を思い描いているわけじゃない。

かといって「どうせ私なんか」って、どっぷり自虐に頭のとっぺんまで浸かって悲劇のヒロインを気取りたいわけでもない。

不平不満を並べたって何も変わらないし、不貞腐れて匙を投げたって、自分の人生なんだから、損をするのは自分だけだと理解できる程度には、年をとってしまった。

ただ、臆病なだけなんだ。

決定的に変わるものを求めているのに、足元がすぐわれることへの恐怖が未来への歩みを躊躇させる。いつも大きく一步を踏み出せなくて、すり足みたいにそろそろと半歩、進むのがせいぜい。

そんな私に、絵に描いたような未来はもうあり得ないって解っているから、なんとか今の状態で最善なルートを探索していこうって、試みている。

もう、若くない。

自分のレベルは重々承知しているから、高望みなんて絶対にしないよ。ただ、この手のひらにちょうどよく納まるくらいの幸せが、欲しいんだ。それくらいを望むことも、贅沢なのかな。だったら私は一体、何を望んだら許されるのかな。

結婚を前提とした交際の申し込みという爆弾発言のあと、榊さんは時間が無いのとこので早々にお帰りになってしまった。

お茶代は榊さんが持ってくれた。というか知らないうちに払われてしまっていて、財布を出す間さえ無かった。粘ろうかとも思ったけれど、きちんとしたホテルのラウンジで払う払わないで押し問答している方が目立ってしまふ。

「すみません、ご馳走様でした」

「いいえ、これくらい気にしないで」

頭を下げる私に対して、榊さんは余裕綽々よゆうしゃくしゃく。そりゃまあ年齢や立場から考えて、誰かにご馳走することに慣れているのだろう。だけどこっちは初対面の人に奢おごられることになんて慣れてない。そりゃ会社の上司とかにご馳走して貰うことはあるけどね。

気付いた時から不況だった私たちの年代では、男の甲斐性を発揮してくれる人なんてそういませんから。

……ただ単に私が男の人から女扱いされてないだけかもしれないけど。

「すみません、もっとゆっくりお話ししたかったです」

榊さんは申し訳なさそうに眉尻を下げる。撮影を抜けて来たらしい。だから十六時なんて微妙な時間だったのか。

「いいえ、貴重なお時間を割いて頂き、ありがとうございました」

「では、また」

「はい」

ホテルのロビーで、あっさり別れた。去っていくうしろ姿を眺めていると、榊浩司だと気付いた人が小さく声を上げたり、ちらちらと視線を投げかけているのがやけに目に付く。

それを見ながら、ああ、やっぱり本物だったんだなあ、と改めて感じた。

その後、ホテルから出てからの記憶があんまり無い。気付いたら私は家に向かう電車に乗っていた。

「ただいま」

都心から快速を使って一時間、勤めている会社までは私鉄で三十分のところ、我が家はある。玄関の扉を開けると、台所からのれんをかき分けてひよっこりと母さんが顔を出した。

「おかえり。あら、夕飯食べてくるって言ってなかった？」

十六時の約束だったから、もしかしてその後夕食、なんて流れになるかもしれないと思いい、家を出る時に食事はいらぬと言つてあつた。我が家のルールで夕食の要不要はきちんと申告することになっている。

母さんには、今日の見合いについて詳しく話していない。そもそも行くまで相手がない人もわからなかつたし。

「ん、無しになつたから欲しい」

「あらあら、じゃあ着替えたら手伝つてね。今日はアジのフライだから」

「はい」

階段を上がつて自室に戻り、よそゆきの服から、部屋着に着替えてようやく一息吐く。お見合いに着ていつたワンピースとジャケットは吊るして消臭スプレーをかけた。丸一日着ていた訳ではないから、これでいいだろう。

化粧は仕事の時より少しだけ気合いをいれたアイメイクだけ、ポイントメイク落としで拭き取る。あとはお風呂に入った時でいい。

「……はあ、疲れた」

クッションを抱いてベッドに寝転がったら、そんな言葉がため息と共に零れた。精神的な疲労が半端ない。ある意味、仕事をしているよりも疲れたかも。

いざお見合いが終わつた途端、何もかもが現実とは思えなくなつてしまつた。

あの、榊浩司とお見合いだなんて、白昼夢でも見たのかつて感じ。

会つていたのは実質一時間弱で、純粹にお茶を飲んだだけ。特別なことは何一つしていない。まともな会話もほとんどしていない。

——じゃあ再来週の土曜日、デートしましょう。

あの低い声が、耳に蘇る。強引な約束。

「……本当に、デートなんかするのかな」

榊浩司とデートなんて、想像できない。

ただ歩いてるだけですぐにばれちゃうような有名人と、そもそもどこ行くの？

さらに結婚前提のお付き合いなんて、何をするのかさっぱり見当もつかない。普通の男女交際とは違ふだろうし。

「結婚かあ……」

去年は友達の結婚ラッシュで、半数以上が既婚者になつてしまつた。まるで二十代のうちに、と駆け込むような有様で、結婚披露宴が月に二回あつた時はため息しか出なかつた。

でも結婚式自体はおめでたいことで、お金はかかるけれど嫌いじゃない。パーティーアクションをするのは大変だけれど楽しいし、出会いがあるかもと少し期待しちやつた

りするし。

とはいえ目の前の光景を自分の場合へと置き換えることは難しい。妄想すら、まるで雲を掴むように曖昧にぼやけてしまう。こんなドレスが着たい、色打掛けもいいよね。なんて子供みたいな想像ですら、上手くできない。

その前段階の恋愛さえ上手くいかないのだから仕方ないのかもしれない。

榊さんのように「また会いましょう」なんて言っておきながら、会った後、ぼったり音信不通、なんて経験、一度や二度じゃない。自分に魅力が皆無とは思わないけど、決定的に何かが足りないってことは十分解っている。

「まあ、社交辞令でしょ」

別れ際「また」なんて言っていたけれど、連絡先も交換してないし。

大スターと一緒にお茶できただけで十分だよ。

分不相応な夢は見ても意味が無いって解るくらいには、私はもう年を取ってしまった。月曜日、社内メールで社長に駄目でしたと連絡しておこう。会ったことで、とりあえず役目は果たせただろう。

「それにしても本当に格好良かったあ！」

子供みたくにベッドの上でジタバタしちゃうくらい、格好良かった！

うう、どれだけ榊浩司がいい男だったか語りたい。誰かに喋ってしまいたい！

あの眼力めちからに、あの声！ あの色気！！

女性誌で毎年恒例の結婚したい男だの抱かれたい男だののランキング上位に入るだけある。もうおっさんじゃない？ なんて言ってた友達に、説教をかましたいくらいだ。アಂತ本物見たら、そんなこと口が裂けても言えなくなるって！

勢いで携帯電話を手にして、ふと我に返る。榊さんの良さを語るにしても……なんて説明すればいいんだ？

どこで会ったかなんて聞かれても、お見合いらしたなんて言えないし。そもそも信じてももらえないんじゃない？ もしも私が友達から「榊浩司とお見合いらした」なんて言われたら……、完全にネタ扱いするわ。絶対信じないな。

携帯をベッドに投げ出して、不思議なお見合いを反芻はんそうする。

なかなか面白い人だった。私のことを正直者だと言っていたけれど、榊さんだって相当だ。ちよつと腹黒そうな感じが、今まで私が持っていたイメージをいい意味で塗り替えてくれた。

もう少し、話してみたかったかも、なんて思っちゃうのは贅沢ぜいたくでもんだよね。

……これは貴重な経験として、胸の奥にしまっておくしかないか。

たまに思い出してにやにやしてやる。今後、榊浩司が出演しているドラマを見るたびに浸れるだろう。普通の人なら見られない一面を見せて貰えた。

なんて、私はあっさりとき跡のようなお見合いを頭の中で整理してしまった。三十路みそじにくよくよ考えたり余韻よゝいんに浸っている時間は無いからね。

「いやー坂本さんっ！ やっぱ見込んだだけあった！」

ところが月曜日、私から報告するよりも先に、また総務課長を経由して呼び出され第三会議室へと行くと、テンションの高い社長が迎えに来てくれた。

「榊から連絡貰っているよ。よろしくお願いしますだってさ！」

社長のもとには榊さんから結婚を前提に交際をしたいと連絡が入っているという。私が社長に報告するように、向こうだって社長に連絡するよね。

それにしても見込んだって……最初、私じゃなくて他の人にお願ひするつもりだったんでしょうが。なんて言えるわけもなくて、はあとか、まあ、とか曖昧に返事をしていたところが社長は私の反応なんてまったく意に介さず、どんどん自分だけの世界へと入り込んでいく。

「あいつはねえ、苦労しているから幸せになつて欲しいんだよね……」

そんな遠くを見つめられても、置き去りにされた私はどうしたらいいのでしょうか。ちらりと助けを求めて総務課長を見ても、お手上げといった体ていで肩を竦すくめていた。ですよね。

「あの、榊さんは何の後輩なんですか？」

明後日の方向へと飛んでいってしまふような社長を引き戻すために質問してみる。

「あれ？ 榊から聞いてないのか」

拍子抜けしたような顔で社長は応じてくれた。よかった、まだ話が通じたよ。

「榊はね、大学の演劇サークルの後輩」

「社長、演劇されていたんですか」
意外、かも。

今の社長は世間一般の中小企業の社長というイメージとぴったり合っている、気のよさと恰幅さかのよさを併せ持つ人だ。私の中になんとなくある演劇のイメージとは、全然結びつかない。

「昔ね。大学を卒業して榊と一緒に劇団立ちあげて、しばらくは役者やっていたんだよ」

これでもね、と社長はメタボなお腹をぼーんと叩いて見せた。

「坂本さんは高卒だったっけ？」

「いえ、短大卒です」

「じゃあ、わからないかな。親父、じゃなくて会長が倒れた時のこと」

「はい」

私が入社した時は、もう今の社長だった。まあ、もう少しスリムだったけど。私にとっ

てたまに顔を見せる会長は社長よりも遠い存在で、杖をつけて歩く姿くらいしか印象が無い。会長は、以前脳梗塞で倒れて、左半身が少し不自由になってしまったと聞いている。「会長が倒れたことをきっかけに、私は跡を継ぐために役者から足を洗ったわけ。今はこうして皆さんに支えられて社長なんかをやっている」

「そうだったんですか……」

……人に歴史あり、だなあ。

神妙な顔で頷いた私に気を良くしたのか、社長はそれから思い出話を始めてしまった。ヤバい、社長は語り始めたらしいのだ。忘年会の時、挨拶が長すぎると毎回毎回社員から不評を買っているくらい。

今度こそ助けてくれよと総務課長を見ると、また肩を竦められた。何のためにここに

いるんだよ！

はあ、もう無理か……

ひとしきり社長は過去を語った後、付け足しのように榊さんとの次の待ち合わせ場所を教えてください。

「ああ、時間は十三時ね」

「……わかりました」

「あれ？もしかしてあんまり乗り気じゃない？」

私の鈍い反応に、ようやく社長が気付いてくれた。社長の話が長すぎて若干疲れたたというのもあるけど、それよりも何よりも。

「いや、乗り気じゃないというか……」

現実味が無いのだ。

榊さんと会って話した。今まで視聴者として勝手に抱いていたイメージとは違う人かもしれない、とは思った。だけどそれだけだ。あの短い時間で私の何を入ったのか、さっぱりわからない。

戸惑い気味の私に、社長は明るく畳みかけてくる。

「榊は気に入らない？年齢以外は完璧でしょう？」

確かに文句のつけどころってほとんどないんですけどもね。ちょっとあの、完璧すぎるって言うか、恐れ多いっていうか、次元が違うところ以外は。

「私にはもったいない方ですから」

やんわりと、お断りする時の常套句を言ってみるけれど、社長は私が遠慮したでも思ったのか、さらっと無視してくれた。

「まあ特殊な職業だからちょっと変わっているところはありますが、いい奴だっことは保証するよ。何も心配することないから」

「……わかりました」

またしても私は、承諾の言葉を返すしかなかった。お見合い一度だけなら、夢で済んだのに。

前と同じように社長が去った後、コーヒーマシンのプラスチックカップを片づけていたら、突然総務課長が口を開いた。

「榊浩司は、そんなに嫌な相手でしたか？」

「へっ？」

「気が進まない様子でしたから」

「いや、もうすぐく格好良かったですよ。ドラマとかで見るとのよりも実物の方が何倍も」

ええ、文句なしのいい男でした。そこだけは強く強く主張したい。ところが総務課長は私の言葉に眉をひそめる。

「それで相手もいい返事を下さっている訳でしょう？ 何か不満でもあるんですか？」

不満なんてあるわけない。だけど、きっと課長には理解できないだろう。

そんなことを質問してやること自体、課長と私が違う証拠。これが可愛い恋人がいるひとと、私みたいにいないひとの考え方の違いってやつなのかな。

「……自分と釣り合わない相手と、どうしろっていうんですか」

夢は寝ている時に見るものだ。未来として思い浮かべるものじゃない。榊浩司とお茶できたことだけでも、私にとっては宝くじに当たったようなものだ。宝くじって何

度も当たるものじゃないでしょ？ そもそも今は少し榊さんが私に興味を持ってくれるとしても、彼の気持ちがずっと私にあるわけがない。

有名人の気まぐれに付き合っつて、痛い目にあうのはこっちの方だ。分不相応な相手との恋愛なんていいことは一つもない。

同じような例で、友達に不倫にずっぱりハマってしまった子がいる。

相手は単身赴任中の職場の上司で、一緒に撮った携帯の画像を見せてもらったけど、そりゃあもういい男だった。十人いたら九人は素敵だねと言っちゃうくらいのわかりやすい、いい男。

だけれどその子の容姿も中身も、友達達の欲目をプラスしてもごく普通。ぶっちゃけ、そんないい男と付き合えるほどの女じゃない。

つまり彼女は相手が既婚者だから付き合えたのだ。

相手の男からしてみれば、ただの現地妻。不倫のお誘いに乗ってくれた都合のいい女。どんなに高価なプレゼントをくれても、甘い言葉を囁いても、その男は女が一番欲しいものは絶対にくれない。

不倫の代償は倫理的なものだけじゃない。

なよりの問題は、大人の男のいい部分だけを見せられることで、同年代の男性とは付き合えなくなってしまうことだ。不倫するような三十代、四十代の男って就職したて

の若造よりはお金も余裕もたっぷり持っている。女の扱いだつて手慣れている。そんな男に一度甘やかされてしまえば、もう自分の基準は上がってしまう。これ以下とは付き合えないってね。

いざ不倫の関係から抜け出せても、不倫相手のように何もかも持っている男つてのは、大概若い時からしつかりといい女にキープされている。新しい恋人なんて、そうそう見つけられない。

とはいえ略奪だつて、現実にはかなりの努力も根性も覚悟も能力もある。簡単にできるわけがない。

だから彼女は今も不倫中で、もちろん独身のままだ。いつか相手が自分を選んでくれる、という夢を見ながら。

人のふり見て我がふり直せ。いい意味でも悪い意味でも、体験したことはすべての指標になる。

自分に相応なもの以上を望んでも、ろくなことは無い。

一度美味しいものを食べてしまったら忘れられなくなって、どうやったつてまた食べたいと思ってしまう。

榊浩司と万が一お付き合いなんてしてしまつたら、今後私は普通の男と付き合い合えなくなつてしまうかもしれないじゃないか。私が望むのはごくごくふつーの、ちっちゃーい

幸せです。有名人のお相手なんて、力不足で無理です。

「あまり自分を卑下するものじゃありませんよ」

「……そうですか」

説教みたいなこと言わないでくれ。

「最初からあなただけでした」

総務課長は面白そうに口の端を上げると、訳のわからないことを、口にした。

「は？」

「榊さんのお見合いの相手。他の人は候補にさえ挙がっていません」

「……どういうことですか？」

社長の口ぶりじゃ、私以外にも話をしていたような感じだったじゃないか。

「ごちゃごちゃ理由をつけていましたけどね、最初からあなたにお願いするつて社長は決めていたようですよ」

「なんでっ!? 鈴木さんじゃなかったんですか？」

私がすつとんきょうな声を上げると、総務課長は苦笑しながら理由を教えてくださいました。

「付き合っていることを言わざるを得なかったのは、社長が私にお見合いを持ってきたからです。久しぶりに仲人をやってみたいとかで」

てつきり鈴木さんに話がきたから、それを止めるために総務課長が付き合っているこ

とを暴露したのかと思っていたけど、逆だったのか。

確かにあの社長は仲人とかそういうの好きそうだもんね。前に社内カップルが結婚した時は、女性がバツイチで二度目だからってことで入籍のみだったからなあ。やりたい気持ち溜まっているのだろう。今時仲人立てることなんて、ほとんど無いのに。

「でもいいんですか？ ばらしちゃったら結局、社長は課長の仲人やりたがるでしょう？」

社員同士の結婚だから、そりゃもう気合いをいれてやりたがるはずだ。

「まあ、それはね。諦めました。別に私は鈴木さんと結婚できればそれでいいですから」

「……ご馳走さまです」

さらつとのろけられたよ、まったく。ハゲてしまえ。

「まあ、もう少し坂本さんは自分に自信を持っていいと思います」

少なくとも社長はあなたを評価していましたよ、なんて総務課長は言ってくれたけれど。

自信、なんて。

粉々に砕かれたことしかないのに、今さら持てるはずがないじゃないか。

榊さんが待ち合わせ場所として指定してきたのは、都心から電車で三十分程離れた、

海沿いの商業施設が集まった場所だった。駅を出てすぐアウトレットモール、さらに近くにイベントホールがあるところで、私も何度か来たことがある。

着いたのは約束の時間の十分前。軽く辺りを見渡してみたけれど、榊さんらしき人は見当たらない。ベンチに腰かけて、駅から出てくる人たちを眺める。探してはみるけれど、あんなに目立つ人だし電車ではなくて車で来るかもしれない。

道行く人の中には、やけに野球のユニフォームを着ている人が目立つ。何か野球のイベントでもあるのかな、なんて思いながら時計を確認すると約束の時間になっていた。

もう一度周囲を見渡してみると、私と同じように待ち合わせしているっぽい人が数人いる。だけどその中に榊さんと思しき人は見当たらない。

そのまま五分、十分と時間が過ぎる。

……やっぱ来ない、か。

当たり前の事実には、感じるのは、もちろん落胆。

でも同じくらいのアホ感も感じるのはどうしてだろう。

予想が外れなかったことに、ほっとしているからだろうか。行き違っている、という可能性も無くは無いかも。直接の連絡先どころか紹介者である社長の連絡先も私は知らないから手の打ちようがない。できることは、ただ待つだけ。

何か事情があるのかもしれない。でも理由は関係ない。榊浩司がここに来ない、とい

う事實は揺るぎないのだから。

「とりあえず、待つ、かな」

腕時計を眺めながらため息が出た。いつまで待っていれば、待ちぼうけを食らったと文句を言えるのだろうか。

三十分？ 一時間？

まあいい、待つよ。本当に諦めがつくまでは。

「いやあ、自信ついちゃうなあ」

「へっ!？」

慌てて声のした方を向くと、柱にもたれた男性がサングラスを外しながらこちらを見ている。

なんと頭に黒い野球帽、白地に縦縞のユニフォームを着た榊さん、だった。肩からは黒いトートバッグを下けている。

「いつからいたんですかっ!？」

「坂本さんと同じくらい、かな。いつ気付くか楽しみにしていたのに、全然気付いてくれないし」

「す、すみませんっ……」

慌てて思いつきり頭を下げた。けど、わからないのも無理ないよ。だって私は、初め

て会った時のオーラむんむんの榊さんを探していたのだから。今日の彼からはあの時の雰囲気はみじんも感じられない。そりゃ言われてみれば、榊さんだっことはわかるよ？でもまったく気付かなかった。

榊さんは口の端を片方だけにやりと上げて見せる。

「すっぽかされたと思った？」

「……思いました」

相変わらず正直だなあと榊さんは笑う。あのね、私の立場ならそう考えても仕方ないと思いませんか。

「信用ないなあ。こっちから言いだしたことなのに」

「……すみません」

過去散々男にコケにされまくってきたから、なんてことはさすがに言えなかった。

「またこういうことがあると困るから、連絡先を教えて貰えるかな?」

「あ、はい」

慌ててバッグから携帯電話を取り出し、赤外線通信でお互いの連絡先を交換した。ところがやっぱり送信されてきた名前には「榊浩司」とある。

うーん、自己紹介で「こういち」と言っていたのは何だったのだろうか？ 社長に聞き忘れていた。

「……スマートフォンじゃないんですね」

思わず口から出てしまったのは、頭で思った疑問とはまったく違うことだった。

榊さんは今大人気のスマートフォンのコマースャルに出演している。メインは売り出し中の若手女優で、その上司という役どころだったはずだ。

「ああ、よく薦められはするけど、僕は携帯でネットをほとんどやらないのでね。メールができれば十分。あんなの宝の持ち腐れになってしまおう」

「それはちょっと解ります。私も携帯で見ると、出かけた時の乗換案内くらいです」家にネット環境があるから、私にとつて携帯はほとんど連絡を取るためのツールだ。ゲームも嫌いじゃないのだけれど、軽い気持ちでダウンロードしたテトリスに携帯が発熱するほど熱中してしまつてからは、あえてやらないようにしていた。音楽を聞くのは携帯プレイヤーが別にあるし、特に不便は感じない。

榊さんは携帯を操りながら、ふと目を細めて言った。

「やつと解ることがあった？」

「えっ？」

そういえば、初対面では解らないとばかり言っていたかもしれない。

「今日はいっぱい解り合えるようにしましょうね」

言葉と共に差し出されたのは、左手。

「はい」

……解り合えることなんて、あるかどうかわからないけど。

握手かなと思つて同じく左手を出したら、思いっきり笑われてしまった。

「坂本さんって面白いよね。はい、こっち」

掴まれたのは、右手。ちよつと！ てっ、手え、繋いでるっ！

一瞬びっくりするくらい、冷たくて、大きな手。

「じゃあバスに乗りましょうか」

サンングラスをかけ直した榊さんに連れられるがままに、歩き始める。

「ど、どこに行くんですか？」

当たり前前の質問をしたつもりだったのに、榊さんはまた盛大に噴き出した。

「僕のこの格好見てそれを言えるのがすごい。野球、見に行きましょう」

「野球？ 夜しかやってないんじゃないんですか？」

野球つてお父さんが晩酌しながら見ているイメージだ。我が家の父はさほど野球に興味が無いらしく、熱心に見ていることはあんまりない。

「ナイターの印象が強いかもしれませんが、昼もやっていますよ」

「なるほど」

野球のユニフォームを着た人がやたら多かったのは、そのせいなのか。